

第61回生命情報科学シンポジウム

開催日： 2026年3月14・15日(土・日) 大会長： 帯津 良一 **ISLIS**前会長

開催地： ビジョンセンター 有楽町 (注意：似た場所名のが多数)

両日朝～303号、両日夕刻 懇親会 301号

主催： 国際生命情報科学会 (**ISLIS**, イスリス)

共催： 科学平和文化財団(**SPC-F**, スプク), 国際総合研究機構(愛理 **IRI**)

〈理事長講演〉

ホリスティック医学・不思議の科学の拠点、

国際生命情報科学会(**ISLIS**)・国際総合研究機構(愛理 **IRI**)・

世界一の「潜在能力科学研究所」・「いやしのビル」へ

人財と連携の結集を

山本 幹男 博士(医学), 博士(工学)

(Mikio YAMAMOTO, Ph.D., Ph.D.)

国際生命情報科学会(**ISLIS**) 理事長・編集委員長、

科学平和文化財団(**SPC-F**) 理事長、国際総合研究機構(愛理 **IRI**) 理事長、

「潜在能力科学研究所」創立責任者、「いやしのビル」企画委員長 (日本、千葉)



要旨：国際生命情報科学会(**ISLIS**)は2025年に創立30周年記念年を下記記念行事で祝った。「ホリスティック(全人的)医学と不思議の科学」を主テーマとする「生命情報科学シンポジウム」を2025年にも**ISLIS**が下記2回主催した。第59回は河野貴美子会長が大会長で日本橋にて3月29-30日(土・日)に延べ約50名の参加で、第60回は帯津良一前会長が大会長で、庭園付の大邸宅伊豆高原「華水月」を借切って、第17回の合宿形式にて8月8-11日(金-月)に延べ90名超の参加で、いずれも大変有意義に開催された。

2026年にも、上記主テーマにて同シンポジウムを2回主催予定である。第61回は3月14-15日(土・日)にビジョンセンター 有楽町 にて 帯津良一前会長が大会長で、第62回は9月4-7日(金-月)に第18回の合宿形式にて地方(未定)にて 大会長募集中で、開催予定で、企画・演題・参加者を募集中。これらに多くの方の講演・発表・セミナー・分科会・ミニシンポ・ワークショップ・実技指導披露等の応募と参加を望む。

これらの開催は、共催の科学平和文化財団(**SPC-F**) 国際総合研究機構(愛理 **IRI**)の助成金とスタッフの全面的協力により可能となっており **ISLIS**として深く感謝する。今後のイベント日程もホームページに掲載。

2025年7月から討論の場として毎月「**Sympo Café**」を **SPC-F** 主催 **ISLIS** 共催にて千葉市稻毛にて開催中。

ISLISは、その兄弟組織でこの分野の幾多の研究成果を挙げてきた国際総合研究機構(**NPO-IRI**)/科学平和文化財団(**SPC-F**)・国際総合研究機構(愛理 **IRI**)と共に、世界一の愛理 **IRI**-「潜在能力科学研究所」を創設し、大型「いやしのビル」を建設し、「ホリスティック(全人的)医学・不思議の科学」を含むこの分野の世界一の拠点に育てたい。企画、構想、連携やこの1年程で100名の人財を公募中で、良い研究者や多方面の人材の推薦等で皆様のご協力を得たい。このために現本部および総武線「稻毛」駅近辺に数カ所のスペースを既に借増し、小型ビルの建築確認済証も発行され、超大型ビルを含む大型ビル3棟の企画設計もまとまった。ここが綺麗で有能な各種人財の結集を望んでおり、自薦・他薦を期待している。また、大学等や国立系研究機関等との連携を模索しつつある。

ISLISの設立趣意は、物質中心の科学技術から、こころや精神を含んだ21世紀の科学技術へのパラダイム・シフト(枠組革新)を通じ、真理の追究と共に、人間の「潜在能力」の開花により、健康、福祉、教育と社会および個人の幸福や心の豊かさを大きく増進させ、自然と調和した平和な世界創りに寄与する事である。

ISLISは1995年の創立以来30年半、現在の科学知識の延長で説明が出来そうもない不思議なこころや精神を含んだスピリチュアル・ヒーリング、気功、潜在能力、超心理現象などの存在の科学的実証とその原理の解明を追求して来た。この間に生命情報科学シンポジウムを、海外での開催や17回の合宿形式を含め60回主催し、英文と和訳付の国際学会誌 **Journal of International Society of Life Information Science** (J.Intl.Soc.Life Info.Sci. or **Journal of ISLIS**)を年2号刊行し、総計7,000頁以上の学術論文と発表を掲載してきた。

この間に、不思議現象の存在の科学的実証には多くの成果を挙げた。しかし、その原理の解明は世界的にもほとんど進んでいない。今後共、これに大いに挑戦したい。

本学会は現在、世界の11カ所に情報センターを、15カ国以上に会員を、擁している。

キーワード： ホリスティック医学、国際生命情報科学会、**ISLIS**、イスリス、生命情報科学、潜在能力科学、国際総合研究機構、愛理 **IRI**、アイリ、科学平和文化財団、**SPC-F**、科学、精神、脳、心身、代替医療、CAM、統合医療、IM、予防医学、未病、精神神経免疫、スピリチュアル、ヒーリング、気功、ヨガ、瞑想、潜在能力、催眠、心、不思議、パラダイムシフト、世界像、世界観、超常現象、超心理、超能力、UFO、UMA、理想主義、現実主義、平和、幸福

<大会長講演>

地球の自然治癒力の回復こそ焦眉の急

帶津 良一 医学博士,医師

第 61 回生命情報科学シンポジウム 大会長

国際生命情報科学会 (ISLIS) 前会長

日本ホリスティック医学協会 名誉会長

帶津三敬病院 名誉院長 (日本、埼玉)



要旨: ここ数日間の大雨による全国各地での水害には目を見張るものがある。その上に、この夏の猛暑である。さらには、一向に衰えを見せない世界各地での紛争の数々。いずれも地球の自然治癒力の凋落ぶりを物語っている。前回は、生と死の統合を果たした人々が、それによって身についた、優しさとえも言わぬダイナミズムによって地球の自然治癒力の回復に貢献することができることを報告した。

一方、自然界は場の階層から成り、そこには上の階層は下の階層を超えて含むという原理が働いているという。つまり、小は素粒子から大は虚空までが場の階層を成し、そこには強力な関係性が存在すると言う。となれば、まずは魄より始めよ！一人ひとりが、内なる生命場のエネルギーを高め、さらには自分が身を置いている場のエネルギーを高めることによって、地球の自然治癒力の向上をもたらすことになるのである。そのためには各人が各様に、場に働きかける養生法を身につけることである。

たとえば、

四民とも家業をよく勤めるが養生の道 (『養生訓』)

酒は天の美禄なり (『養生訓』)

道を行ひ、善を楽しむ (『養生訓』)

生きながらにして虚空と一体になる (『夜船閑話』) 新呼吸法「時空」

養生の訣も、亦一箇の敬に帰す (『言志四録』)

その他にも太極拳、講演、恋心などもある。いずれにしても焦眉の急である。一刻も早く、身を動かし、気をめぐらそうではないか。

キーワード: 地球の自然治癒力・場の階層・家業・酒・道・新呼吸法「時空」・太極拳・恋心・敬・焦眉の急

帶津 良一 医療法人直心会 帯津三敬病院 名誉理事長 〒350-0021 埼玉県川越市大字大中居 545 番 Tel: 049-235-1981

<会長講演> (仮 前回のまま)

香りの生体への影響を探る

河野 貴美子

国際生命情報科学会 (ISLIS) 会長

国際総合研究機構 (IRI) (日本、千葉)



要旨: 河野はこれまで、様々な香りがもたらす生理学的な変化を、主として脳波を指標として報告してきた。

この ISLIS シンポジウムにおいても 2011 年に「各種香りの生体への影響の差異 - 脳波による検討 -」と題して、スポーツ実施前のリラックス誘導効果や催眠瞑想時の瞑想導入効果などを脳波の、特に α 波を指標として解析し、心拍や呼吸数の変化とともに総合的に報告した。今回、大変貴重な香りとされる龍涎香(マッコウクジラの腸にできた結石が排出され海を漂って海岸に漂着したもの)聴香時の各種生理変化を一般的なエッセンシャルオイルと比較検討した。前回同様、心拍、呼吸、脳波など生理指標の変化を報告し、さらに今までに検討した各種香りにおける実験と合わせ、香りの生体への影響を多角的に検討する。

キーワード: 地香り刺激、龍涎香、リラクゼーション、呼吸、心拍

著者連絡先: 263-0051 千葉市稻毛区園生町 1108-2 ユウキビル 40A 電話 043-255-5481 電子メール:kawano@a-iri.org

<常務理事講演>

ピラミッドパワーの科学的研究（2007年10月～2026年3月） (Scientific Research on Pyramid Power: Studies from October 2007 to March 2026)

高木 治, 河野 貴美子, 山本 幹男
国際総合研究機構(IRI), 科学平和文化財団(SPC-F) (日本、千葉)

要旨：我々は2007年10月以来,ピラミッド型構造物(pyramidal structure: PS)の未知なるパワー(ピラミッドパワー)の存在を実証するため,厳密に科学的な実験を続けている.実験では,バイオセンサ(キュウリ切片)をPS頂点と頂点から8m離れた較正基準点(コントロール)に30分間置き,その後バイオセンサを密閉容器に移し,48時間程度保管した後,容器内の揮発成分(ガス濃度)を測定した.我々が行っているピラミッドパワーの実験は,主に次の2種類である.I)「ピラミッドパワー実験(PP実験)」: PP実験は,PS自体が潜在的に持っている,いわゆるピラミッドパワーを検出する実験である.II)「瞑想実験」: 瞑想実験は被験者がPS内に入り瞑想(ヘミシング)を行う実験であるが,瞑想中との比較のため,瞑想前と瞑想後の時間帯でも,PS頂点と較正基準点にバイオセンサを置いて実験を行っている.PP実験によって実証した内容は,主に次の5点である.1) PSのピラミッドパワーの存在を明らかにした(1%有意で実証: 夏期データ).2) PSのピラミッドパワーが,PS頂点に2段に重ねて置いたバイオセンサに対して,下段と上段で異なることを明らかにした(ピラミッド効果の大きさを示すサイ指数Ψが,下段のバイオセンサに対するサイ指数Ψは-3.01でマイナスの値,上段に対するサイ指数Ψは5.52でプラスの値となり,下段と上段で有意差を得た. $p=4.0 \times 10^{-7}$).3) PSの潜在力の詳細な解析の結果,バイオセンサ間の絡み合い(Bio-Entanglement)と考えられる現象があることを発見した.4) PS頂点のピラミッドパワーによるバイオセンサに対するピラミッド効果は,季節に依存せず一定であること.また,Bio-Entanglementによるピラミッド効果は,季節依存性を示すことを明らかにした.5) PS頂点のピラミッドパワーが,バイオセンサの特性であるガス濃度の概日リズムの位相に影響を与えることを明らかにした.瞑想実験によって実証した内容は,主に次の4点である.1) PS内で被験者が瞑想中,及び瞑想後を比較した結果,バイオセンサに対するピラミッド効果が異なった($p=3.13 \times 10^{-10}$).2) PS内で被験者が瞑想した影響は,約20日間程度残り,瞑想後20日以降は,ピラミッド効果が検出できなくなった.3) PSの有無,瞑想の有無の組合せは4通りあり,それぞれ実験を行った.その結果,ピラミッド効果の発生要件が明らかになり,PS内で被験者が瞑想した時のみ,ピラミッド効果が有意に検出された.4) 瞑想前実験は,被験者が実験室から6km以上離れた自宅に居る時に行った.瞑想前日の実験と,瞑想の数時間前の実験を比較した結果,瞑想前日のピラミッド効果は誤差の範囲でゼロとなったが,瞑想数時間前のピラミッド効果は有意な値となった.本発表では,これまでの実験結果の全体を説明するとともに,最近の実験データを追加した解析結果とを比較し,検討する予定である.ピラミッドパワーに関する研究は,未だアカデミズムの世界では異端と見做されることが多い中,我々の実験結果は,この分野において世界初の研究成果である.今後この成果が一般に広く認められ,科学における新たな研究分野となり,幅広い応用の可能性が期待される.

キーワード：ピラミッド,潜在力,瞑想,ヘミシング,バイオセンサ,キュウリ,ガス,サイ指数,Bio-Entanglement

代表著者連絡先：〒263-0051 千葉市稻毛区園生町1108-2 ユウキビル4FA 電話 043-255-5482 電子メール : takagi@a-iri.org

<研究発表>

潜在的なピラミッドパワーに対する太陽活動の影響 (The Influence of Solar Activity on Potential Pyramid Power)

高木 治, 河野 貴美子, 山本 幹男
国際総合研究機構(IRI), 科学平和文化財団(SPC-F) (日本、千葉)

要旨：我々はピラミッド型構造物(pyramidal structure: PS)の未知なるパワー(ピラミッドパワー)の研究を,2007年10月から続けている.そしてピラミッドパワーを検出するため,バイオセンサ(食

用キュウリ切片)を使用した厳密に科学的な実験を行い、ピラミッドパワーの存在を実証した。これまで、バイオセンサに対する次の2種類のピラミッド効果が明らかとなった。(i) PSの潜在力によるピラミッド効果。(ii) PS内部での被験者の瞑想によって影響されたピラミッド効果。PSの潜在力によるピラミッド効果の解析から、バイオセンサ間の“絡み合い”的な現象に着目し、“Bio-Entanglement”と名付けた。これにより、それまでピラミッド効果の大きさを示す指標(サイ指数: Ψ)が、実はPSの潜在力によるピラミッド効果(サイプライム: Ψ')と Bio-Entanglement によるピラミッド効果(サイダブルプライム: Ψ'')が入り混じったものであることが分かった。そして、PS頂点の潜在力は、上下2段に置いた試料に対する効果(Ψ'_{layer1} , Ψ'_{layer2})が、年間を通じて $\Psi'_{layer1} < \Psi'_{layer2}$ となるようなパワーであることが判明した。また、Bio-Entanglement によって、 Ψ''_{layer1} と Ψ''_{layer2} は、値がほぼ一致しながら、季節変化することが判明した (Ψ''_{layer1} (冬) < Ψ''_{layer1} (夏))。本発表では、PSの潜在力による3種類のピラミッド効果(Ψ , Ψ' , Ψ'')の中で、特にサイ指数 Ψ に関して様々な太陽活動との関係を解析する予定である。具体的には、太陽黒点数とピラミッド効果の相関、太陽風のレベルとピラミッド効果の相関等を報告する予定である。

キーワード：ピラミッド、バイオセンサ、キュウリ、Bio-Entanglement、太陽黒点、太陽風

代表著者連絡先：〒263-0051 千葉市稻毛区園生町 1108-2 ユウキビル 4FA 電話 043-255-5482 電子メール : takagi@a-iri.org

参考文献

- [1] Takagi, O., Sakamoto, M., Kawano, K. and Yamamoto, M. (2021) Potential Power of the Pyramidal Structure IV: Discovery of Entanglement Due to Pyramid Effects. Natural Science, 13, 258-272.
<https://doi.org/10.4236/ns.2021.137022>
- [2] Takagi, O., Sakamoto, M., Kawano, K. and Yamamoto, M. (2021) Potential Power of the Pyramidal Structure V: Seasonal Changes in the Periodicity of Diurnal Variation of Biosensors Caused by Entanglement Due to Pyramid Effects. Natural Science, 13, 523-536.
<https://doi.org/10.4236/ns.2021.1312046>

<研究発表> 「こころ」の起源について考えるシリーズ
(仮) 「生命の起源」を汎心論的に捉えなおしてみる
岡田真一 博士(理学)、臨床心理士
科学平和文化財団 国際総合研究機構(愛理, IRI)(日本, 千葉)



要旨：物質進化・生命進化のどこかの時点で突如として「こころ」が生じたと考えるよりも、物質進化の時点ですでに「こころ」または「こころの基となるシーズ」は、内包されていたとみる方がより自然である。無から有は生じない。「こころ」についても同様ではないのか。

キーワード：生命の起源、汎心論、CHONS と MgFeSiAl、有機体が内包する2つの志向性

連絡先：Tel:090-6521-7951 E-mail : makuharihamada@gmail.com

<研究発表> (参考 前回の) 「こころ」の起源について考えるシリーズ
日蓮、ホワイトヘッド、ユング、シェルドレイク...
岡田 真一 博士(理学)、臨床心理士
科学平和文化財団 国際総合研究機構(愛理, IRI)(日本, 千葉)

要旨：13cの日蓮遺文(「御義口伝」の冒頭部分)の記述1)と20c初頭のA.N.Whitehead中期哲学中の概念(「自然認識の諸原理」2))は、現在改めて振り返ると、時空中に“自立能動で群れを成し出した安定的な素粒子、原子、分子、結晶、高分子、錯体、生命、恒星、小宇宙…(自己組織化体)”は、同一性回帰志向により物質としての静的・動的形態安定性を確保しつつ、多様性展開志向によって得た新たな”経験・機縁“を、何らかの方法で共有し安定化させ、無意識化・習慣化・自動化・定着化・法則化…させる微妙な2志向性の相互作用(これがそもそもの“こころ”の起源か….)を描いた点で、類似していた。

一方、20c初頭,C.G.Jungは、「共時性」概念の提唱で独自に心身二元論を乗り越え、「心と身体は別々の実体ではなく、全く同一のいのち」3)との解釈に到達している。ただ、その一方で、民族、人類…に共通の元型を含む集合無意識がいかに形成されたのかについてはいささか歯切れが悪い。すなわち、果たして個体がそれぞれ経験した事象がどのように共有されていったのか、その機構が当時(現在も)不明であったことが大きいのだろう。

この困難について R.Sheldrake は、その存在形態に時間項(振動)が含まれるものは、その振動の膨大な繰り返しという過去が現在に流れ込み、その存在形態を安定化させるとの仮説を唱えた(だから時空中に大量にある水素原子の姿は、数式表現できるほど安定ととらえる)4)。しかも、他の動的パターン(新規な分子・結晶形態発生から動物の記憶・思考・

行動パターンまで) も繰り返されることで、レベルは異なるものの、より容易に起こるようになり安定化する。そのうえで、縁起的(たまたま)に生じた事象も、類似パターンが繰り返され、または繰り返すことでより習慣化・定着化・法則化すると説く。

もしこの仮説が何らかのかたちで確認されれば、つまりは、日蓮、Whitehead が描寫した自己組織化体に働く志向性の一つ(同一性回帰)は、もう一つの志向性(多様性展開)の膨大な繰り返しによる定着化・法則化したイベントとの結論に至る。Jung が突破できなかった集合無意識の形成過程も、このことで理解可能となるだろう。そしてこの姿こそ“こころ”という事象が、多様性展開志向に鋭敏な意識部分と半ば定着しつつある個人的無意識および広大深遠な集合無意識領域…で構成された各階層が、同時に激しく流転していくゆえんであるのかも知れない。

1)植木雅俊、日蓮の思想-「御義口伝」を読む、筑摩選書 281、筑摩書房、2024.

2)森元斎、ホワイトヘッド哲学における生成と主体、年報人間科学、No.31, 1-14, 2010.

3)桑原晴子、心と身体の関連性に関する分析心理学的研究の展望、岡山大学大学院教育学研究科研究集録、No.162, 47-57, 2016.

4)Rupert Sheldrake, Setting science free from materialism, EXPLORE, Vol.9, No.4, 211-218, 2013.

キーワード：日蓮、ホワイトヘッド、ユング、シェルドレイク、元型の形成、汎心論

連絡先：Tel:090-6521-7951 E-mail : makuharihamada@gmail.com

<研究発表> (参考 前回の) 擬態を考えるシリーズ

(仮) 共時性・集合的無意識概念の拡張からの擬態理解へのアプローチ

岡田真一 博士(理学)、臨床心理士

科学平和文化財団 国際総合研究機構(愛理、IRI)(日本、千葉)

要旨：作成中

キーワード：生物の擬態、生態系ネットワーク、心身問題、風土臨床

連絡先：Tel:090-6521-7951 E-mail : makuharihamada@gmail.com



<研究発表> (参考 前回の) 擬態を考えるシリーズ

「擬態」進化と風土

岡田 真一 博士(理学)、臨床心理士

科学平和文化財団 国際総合研究機構(愛理、IRI)(日本、千葉)

要旨：現況での最大の超常現象は、生命現象そのこと自体であろう。なかでも、生物の驚異的な擬態は、古来より人々の興味と関心を惹きつけてきた。演者もその一人である。本発表では、まず数種の昆虫等の擬態例を見ていく。そして、これらの驚異的な「擬態」は、従来から唱えられているような「突然変異(たまたま)」と「自然淘汰(生き残ったもの勝ち)」で果たして説明し尽くせる事象なのか?また、そもそも擬態に関し「いかに?」を問い合わせることにより「なぜ?」まで行きつけるのか、参加者の皆様とともに考えてみたい。

この「擬態」の謎を突き詰めていくと、根源的な謎にたどり着かざるを得ない。それは、生物の各個体に仮に「経験、夢、こころ」が備わっているとして、それらは各個体の死によってすべて消えてしまう物事なのかどうかである。もし、そうであれば、擬態進化は個体の経験、夢、こころとは無関係ということになる。その一方で、個体の経験の一部は、たとえばスイッチング遺伝子のオン/オフパターンで次世代に伝わることが確認されているが、その果てに大規模な擬態形成がなされることを想像するのはむずかしい。

他方、心理臨床の分野で「風土臨床」という概念が唱えられている 1) . すなわち、生態系と周辺環境すべてを含めた風土自体がいわば「こころを持ち、夢を観て」おり、そこに生きる個体は、風土のそれらを共有・分有しうるという考え方である。そして沖縄のカミンチュウ(神職)の観る夢が風土にかかわる出来事と対応している例を挙げ、「身体像」が「土地」に拡大・投影され、現象として心身の「心」と風土の「風」のシンクロをもたらすと象徴的に記されている。

上記のような心身と風土の相互作用は、人間と風土に限らず、あらゆる生物個体と風土の相互作用の存在を予想させる。すなわち、生物の擬態進化についても、まず風土と各々の生物個体との心的相互作用が存在し、そのうえで身体の連関的な変化が起きている可能性を想像させるものである。

1) 青木真理編著：風土臨床：沖縄の関わりから見えてきたもの－心理臨床の新しい地平をめざして－、星雲社、2006.
キーワード：擬態、進化、風土、経験、夢、こころ

連絡先：Tel:090-6521-7951 E-mail : makuharihamada@gmail.com

<研究発表>

アートセラピーで自分の潜在意識を知ることが 社会の健全性、平和へと連なる

黒須 美枝

アートセラピストアカデミー有限会社 代表取締役 (日本,埼玉)



要旨：幸せ觀を感じられない人達が激増している。外側の情報に一喜一憂し、自分とはどういう人間なのかを基本的に知らないことで、人生を自分でコントロールできない。様々な局面で不確実性が高まっている今、アートセラピーで描かれた画は自分を知るデータであり、自分の潜在意識に気づくことで、自分が生まれた意味を知ることは重要である。一例として「怒り」の画を描いてもらうと、各自の今生で超えるべきテーマがあらわれる。普段から自分が情報発信(=表現)していること、特に「無意識に表現していること」に「気付かされて」、そのことに「意識的になる」ことで人生に(→よい方向への)変化が起った例を紹介する。自分の人生のテーマを深く知ることが、社会との共生を健全にし、結果社会の健全性へと連動する可能性がある。宗教でもなく心理学でもないアートと言う表現をアートセラピストと共にすることで新たな自己発見に繋がる。

キーワード：アートセラピー、今生で超えるべきテーマ、無意識、怒り、不確実性、心のデータ、情報、健全性、コントロール、自己発見

連絡先：Tel: 048-647-3080090-6521-7951 E-mail : cross@arttherapist-academy.com

<研究発表>

CTMU の論理構造とその限界 —CTMU・ゲーデル・信仰的跳躍

谷口 隆一郎 博士 (哲学)

聖学院大学総合研究所 教授 (日本,埼玉)



要旨：CTMU は、宇宙を自己記述的構文言語 (Self-Configuring Self-Processing Language: SCSPL) として理解する理論である。中心的概念である Telic Principle は、宇宙が自己更新を行う際に矛盾を回避し、一貫性を最大化する方向で自己選択を行うことを保証する。この原理に基づけば、宇宙には外部が存在せず、すべては内在的な自己記述のプロセスとして完結する。比喩的に言えば、宇宙全体は「自らを絶えず書き換え続ける巨大なプログラム」に類似しており、外部からの命令を必要とせず、自律的に更新を繰り返す。このような閉じた一貫性は論理的にはきわめて洗練されているが、その枠組みは悲惨や不条理の出来事を「バグ」や「入力エラー」として処理してしまう危険を孕む。すなわち、出来事の切実さそのものが体系内部で中和され、倫理的な問いとしての迫力を失う可能性がある。本稿は、この緊張関係を批判的に検討し、自己完結的宇宙論と倫理的応答可能性との接点を探るものである。

<研究発表>

余白と構文 —CTMU とシナージック理論を 媒介とした信と構造の統合哲学の試論

谷口 隆一郎 博士 (哲学)

聖学院大学総合研究所 教授 (日本,埼玉)

要旨：本稿は、クリストファー・ランガンの Cognitive-Theoretic Model of the Universe (CTMU) と、ハコボ・グリンバーグ＝シルベルバウムのシナージック理論 (Syntergetic Theory) を比較し、両者を媒介する新たな視座として「余白」の概念を導入することを目的とする。CTMU は宇宙を自己記述的構文として閉じるモデルを提示するが、その枠組みにおいて悲惨や不条理は「人間の選択」あるいは「構文的必然」として回収され、倫理的契機が弱まる傾向をもつ。これに対してシナージック理論は、脳の神経場と非局在的格子との相互作用によって経験が生成されるとし、局所的な「シナジー (synergy)」を経験統合の度合いを示す指標として位置づける。本稿は、シナジーを CTMU における Telic 整合の局所的指標として読み替える一方で、悲惨や不条理を単に体系内に回収せず保持する「余白」の概念を導入する。そのことによって、倫理的応答の契機を開示し、「信と構造の統合哲学」としての可能性を展望するものである。

<一般発表>

鹿との平和的共生方法

橋爪 秀一

Idea-Creating Lab (日本、横浜)



要旨：縄文時代から、日本人は鹿に対して可愛らしい、高貴である等の好印象を持っており、神使或は神獣として崇めてきた。しかし、2022年には年間約57万頭の鹿が害獣として駆除されている。今回の発表は、ニュージーランド、台湾、モンゴル、スコットランド、中国及びドイツにおける鹿との付き合い方について報告し、鹿との共生方法について考察したい。日本では、鹿との共生方法に関しては、多々試行はしているが、鹿を柵により締め出すこと以外の方法では、優れた効果が認められないのが現状である。我々は銃或いはワナのような過激な手段での鹿との共生ではなく、平和的な鹿との共生を求めている。最近、六甲山のイノシシには毛繕いに関するルールが存在し、そのルールを守っていることが明らかになった。これは、イノシシ社会にはルールがあり、イノシシはそれを学ぶ学習能力があることを示している。この学習能力を利用した鹿との共生方法を考えたい。更に、将来的には、この平和的な鹿との共生方法を、自然、クマを含めた動物、植物、他国など様々な対象との共生に如何に生かすかも模索していきたい。

キーワード：鹿、害獣、ルール、学習能力、共生

連絡先：橋爪秀一、E-mail: hashizume.shu@nifty.com

<一般発表>

鼓膜穿孔時の低侵襲による画期的治療法ほかカルマを焼く中医学的エネルギー治療法のご紹介

朝日 舞

一般社団法人 健康科学研究所 (日本、千葉)

要旨：近年様々な治療法や施術法が出てきました。現代のストレス社会では様々な原因により鼓膜に孔があき、聴力低下で困っている人は全国で100万人以上と推測されています。僅か20分で出来る低侵襲の鼓膜再生療法を、また難病の原因ともなる体内に潜む負のエネルギーを可視化できる、火療法カルマ焼[®]を併せてご紹介致します。

キーワード：鼓膜穿孔、低侵襲、エネルギー、可視化、火療法、カルマ焼

連絡先：asahimai318@gmail.com

<講演>

ネイチャークラシーの時間論 ～多時元生態系の倫理を物語る（仮）

荒井 紀人

フリー / 科学平和文化財団国際総合研究機構(愛理IRI) (日本、千葉)



要旨：世界中で台頭しているテクノクラシーによる全体主義的な制御グリッドは、現在のサイエンスにおいて支配的な、物質的・空間的・量的な時間のパラダイムを基に、高速計算・高速通信・精密時刻同期の技術によって実装されている。その際、グローバルな同期のために使われる人工的な世界時計は、最小時間単位を加算することによって成り立つ。一方、自然界における物質～生物の天然時間は、アト・フェムト・ピコ・ナノ・マイクロ秒などのミクロからマクロ方向へ還流する多元的な階層にまたがるマルチ・タイム・スケール(MTS)における、多数の時計の同期によって成り立っている。近年、MTS の時間論は日本のベルグソン研究者によって急速に発展を遂げつつあるが、テクノクラシーに対抗する真に持続可能な社会、即ち、ネイチャークラシーへの転換を目指すために、MTS の観点から、時間自体の持続可能性に向けて新たな問いを開いていきたい。今、多時元生態系の倫理を物語ることはどこまで可能なのか？

キーワード：ネイチャークラシー、テクノクラシー、マルチ・タイム・スケール (MTS)、グローバルシンク、ホリスティックシンク、持続可能な時間、多時元生態系の倫理

連絡先： norihito-arai@iri-g.org

<一般講演> (仮 前回のまま)

日常における「非日常空間」の創出 ～ファミリー・コンステレーションの土着化の試み～

谷口 起代 博士 (社会デザイン学)

合同会社共創ラボ代表、立教大学社会デザイン研究所研究員 (日本, 千葉)

要旨: ファミリー・コンステレーションは、欧洲で発展したシステム家族療法の一種で、代理人を用いて家族関係の力動(ダイナミクス)を探る手法です。私はこの手法に出会って25年、精神障害者支援や大学教育の現場を通じて、心理療法とソーシャルワークの統合的実践を重ね、地域社会に根づかせる取り組みを進めてきました。



この手法の実践では、代理人が実際には知らない家族の情報を身体感覚として「感じ取る」など、科学的には未解明の現象がしばしば現れます。こうした現象はオカルト的と見なされることがあります。当事者の認知変容や関係性の気づきを促し、深い癒しや再統合をもたらすことがあります。

私はこの営みを専門家だけの閉じられた治療ではなく、月1回の塾(他者と共に生きられる身体づくりを目的とした場)として、一般に開かれた「非日常空間」として、地域に展開してきました。本発表では、その実践過程と得られた洞察を紹介し、こうした場が現行の保健医療福祉制度が推進している地域共生社会に向けた取り組みの不足を、補完しうる可能性について提起します。

キーワード: システミック・ファミリー・コンステレーション、日常における「非日常空間」の創出、心理療法とソーシャルワークの統合、地域共生社会

<ミニシンポジウム 「起源」を考えるシリーズ> (仮 前回のまま)

「こころ」の起源について考える —それぞれの視点から—

ファシリテーター 岡田真一 博士(理学)、臨床心理士

科学平和文化財団 国際総合研究機構 (愛理, IRI) (日本, 千葉)

要旨: 「こころ」はどこから来たのでしょうか。人や動物にのみ存在するのでしょうか。死とともに失われるのでしょうか。または生死を超えて続くのでしょうか。物質や物質の動きとは別次元の「ものごと」なのでしょうか。あるいは「からだ」の物理・化学的な運動・反応に伴う付随物・副産物に過ぎないのでしょうか。現実社会を観ると、21世紀も四半世紀が過ぎようとする今ですら、戦火はむしろ拡大し、物質主義・新自由主義の嵐が各国で吹き荒れ、殺伐としたムードが人々の気持ちを席巻しているようです。だからこそ「こころ」の行く末を観じるために、一度原点に立ち戻る必要があるのではと考え、企画いたしました。

本ミニシンポジウムでは、各々のパネリストにそれぞれの視点から、とてもではないが語り尽くせることではないと承知しつつ、敢えて手短にその見解を語っていただけます。パネリスト講演後の総合討論では、ご参加の皆様の熱いご意見・ご討議をお待ち申し上げております。

キーワード: こころの起源、からだとこころ、意識と無意識、ものとこと、魂と魄

連絡先: Tel:090-6521-7951 E-mail: makuharihamada@gmail.com

日常の中の「超常」を語る—

ファシリテーター 岡田真一 博士(理学)、臨床心理士

科学平和文化財団 国際総合研究機構 (愛理, IRI) (日本, 千葉)

要旨: 科学はそもそも「再現性」と「妥当性」が常に問われるものです。しかし、そのことにこだわり過ぎると、日常の中で、実はどう考えても超常的と思わざるを得ないような貴重な経験・エピソードが、報告もされず放置され、個人の記憶の忘却に任せて失われてしまうことが相当存在するのではないかでしょうか。加えて、現状の物質主義的な教育のせいか、「個人的な一過性の経験やエピソードなど、科学になり得ないし、取るに足りないこと…」などと決めつけてしまうことが多いのではと危惧しております。一方、科学の中でも、天文学は再現性を問うことが困難な学問ですし、臨床心理学の歴史は、個別の特異な事例と思われていたものでも、類似事例の集積により背後にある普遍的な構造が次第に明らかになるということの連続でした。つまり、ある人が「どうでもいいこと」などと思っている経験・エピソードの中に、他の方も「私にもそういう経験があって…」などと、実はどうでもいいどころか、未だに知られていない事象の現れである可能性が大いにあるわけです。そのような認識が少しでも広がることを願って本ミニシンポジウムを企画いたしました。

本ミニシンポジウムでは、各々のパネリストに「実は私は…」的な経験・エピソードを語っていただきます。パネリスト講演後の総合討論では、ご参加の皆様の「実は私にも…」的な経験・エピソードに関する語りも一同でワクワクしながらお待ち申し上げる次第です。

キーワード: 日常のなかの超常、個人的経験、個人的エピソード、「実は私にも…」

連絡先: Tel:090-6521-7951 E-mail: makuharihamada@gmail.com

<ミニシンポジウム> (仮 前回のまま)

「地球幸福憲章」

ファシリテーター 山本 幹男 博士(医学)・博士(工学)

「地球幸福憲章」起草者代表 (日本, 千葉)

要旨： 「**地球幸福憲章**」は、場当たり的な政策でなく、無宗教の人も宗教を信じる人も含めて、皆の数千年間の指針となるべき、地球上が丸ごと皆が平和で幸福になるべき憲章を目指して、2012年に山本幹男が草案を提起し、2年掛で数十人が参加しての50回程の議論を経て起草された。その後、ちばてつや 漫画家(2025念に文化勲章受章)や故日野原重明 医師等 高名な方々に「提唱者」や「賛同者」となって頂き、2014年9月9日に神田の日本学士会館にて創立総会を開催し、記者会見し発表した。その後、人材や資金不足等で、この普及推進活動が出来ていなかった。

しかし、戦争が多発している今こそ、本憲章が必要で 平和への関心が高まっているので、これを再開しなければならないので、是非とも多くの方々に、この運動にご参加頂きたい。

キーワード： 地球幸福憲章, 幸福文明, 精神文明, 生き甲斐, 平和, 戦争, 幸福, 自由, 平等, 博愛, 民主, 環境

連絡法：mikio-yamamoto@iri-g.org Fax 043-255-9143 090-9232-9542

コメンテーター： 募集中

鈴木 洋美

荒井 紀人 科学平和文化財団 国際総合研究機構 (愛理 IRI)

全世界の、ヒューマニスト、ロマンチスト、アイディアリスト(理想主義者)、
エコロジスト、リベラリスト、パシフィスト(平和主義者)
全員集合 「地球幸福憲章 net」へ

2014年9月9日発表版
起草者代表 山本 幹男 博士(医学)・博士(工学)

地球幸福憲章

The Earth Happiness Charter (TEHC) テーク

— 人類はきょうだい、生物は家族、地球・宇宙は家 —

-Humanity as Brothers and Sisters, All Living Creatures as One Family, the Earth and Universe as Home-

今までの目覚ましい科学技術の進歩と資本主義経済システムにより、今まさに物質文明が開花している。それは、人々の生活を快適にする一方で、核兵器に象徴されるように人類絶滅の危機さえもたらした。更に、地球規模の自然破壊や貧富格差を引き起こし、資源や覇権をめぐる紛争も絶えない。

本憲章は、繁栄の陰に生じた弊害や危機を乗り越え、人類と生物や地球・宇宙の永続的で輝かしい未来を創るために、**物質文明と精神文明を統合し、「人類は兄弟、生物は家族、地球・宇宙は家」との根本理念に基づく「地球幸福文明」への転換**をここに提唱する。

目指す「**地球幸福文明**」は、今までの文明の貴重な概念である、**自由・民主・平等・博愛・連帯・参画・福祉・健康・平和・自然保護・共生**を成熟させ現実化する。また、個性が生かされ、生き甲斐と愛・喜びに満ち、生き生きと生きられる、皆が社会・生物・自然と共に 幸福に生きる事を主眼とした文明である。

人種、民族、宗教、国家の垣根を超えて、世界の人々による**連帯と多様な価値観**への理解に基づく、あらゆる外交、経済、文化的努力により平和を実現する。核兵器・生物化学兵器などの速やかな全面禁止、通常兵器の段階的削減、そして廃棄を目指す。

経済システムは、弱肉強食・収奪と浪費型から、**民主的で公正なシステム**に転換する。福祉・健康・文化・環境・共生・平和・精神性を重視した経済活動を促進する。

この文明の実現のためには、一人一人が、全ては全体と相互に繋がり合う、掛け替えのない存在である事に気付き、先人の叡智に学び、潜在能力を開き、他への思いやりの心を深めると共に、分かち合う行為が必要である。

本憲章に賛同する世界の人々による「**地球幸福憲章ネットワーク**」とその「**世界本部**」をここに創設し、これを皆の力で発展させることにより、**本憲章**と**「地球幸福文明」**の実現をめざす。このために、世界の多くの人々・団体と叡智の本「**地球幸福憲章ネットワーク**」への結集を求める。

<一般講演>

農・食・音が響かせる、みんなで育てる日本の文化と未来

伊藤 淳

科学平和文化財団 国際総合研究機構(愛理IRI) (日本,千葉)



要旨：農作業や食料づくりは、とても大変な仕事です。そのなかで人々は作業に歌を取り入れたり、太鼓や楽器を使ってリズムを刻み、きつい時間も仲間と共に乗り越えてきました。そうした日々の営みが、収穫祭や地域のお祭りなどの文化へと発展し、人をつなぐ豊かな伝統となってきたのです。本プレゼンでは、人が農作業や食で感じる豊かさや喜び、仲間とのつながりに、歌やアート・音楽を掛け合わせ、微生物や自然の力まで取り入れることで、心も体も健康になる地域再生モデルを提案します。土や水を育む微生物も、音やリズムの刺激で活性化し、作物や土壤がより元気になることが最新研究から明らかになっています。微生物や自然の営みを感じ、「みんなで少しずつ関われる新しい農・食・文化の形」で今の暮らしに実践できるヒントとして発信していきます。

キーワード：豊かな仕事、食と農の再創造、日本の文化、自然に寄り添う暮らし、地域とともに、未来への種まき、土と生きる、みんなで育てるまち、自然、生活の質、QOL、楽しい仕事、おいしい食、家族、平和、自給自足、健康、地域再生、微生物、コミュニティ、資源、人間力、調和、音楽、アーティスト

伊藤 淳 : junitojunto77@gmail.com

<一般講演>

時代は骨盤底筋群

芳賀 ゆかり 理学療法士

科学平和文化財団 国際総合研究機構(愛理IRI) (日本,千葉)



要旨：体を鍛える、ダイエットのために運動を行う際に、一度は「体幹を鍛える」という言葉を耳にはないだろうか。確かに体幹を整えることは重要で、良い姿勢を保つことや運動時におけるパフォーマンスの向上を担う働きがある。そのため加齢や運動不足により筋肉が少なくなると、反り腰や猫背などの姿勢崩れが生じやすく、歩行や内臓に関する様々なトラブルに見舞われやすい。しかし「体幹を鍛える」と聞いて、思い浮かべるのは腹筋や背筋などの部位を想像する方が多いのではないか。

もちろん、腹部や背部の深層筋の働きは大事になるが、今回のシンポジウムでは、意外と見落とされがちな骨盤底筋群にフォーカスしてみたい。骨盤底筋群の働きは尿や便のコントロールといった排泄機能や、妊娠・出産を支える役割と認識されているが、それだけには留まらない。女性だけでなく男性にとっても重要な働きをしている骨盤底筋群。その働きや重要性について理解を深めていただきたいと思う。

キーワード：骨盤底筋群、呼吸、姿勢、内臓、体幹、インナーマッスル

芳賀ゆかり : yukari-haga@iri-g.org

<一般講演>

技芸の起源／言葉の物語～言葉と映像による表現～

結

フリーランス／国際生命情報科学会 (日本, 千葉)



要旨：いまこの時代を「良く」生きるのは、それ自体が高度な技芸と言えないだろうか。今の社会システムはあまりにも複雑化したために、個々の人間がその基層となっている仕組みを知ることが非常に難しくなっている。AIが産声をあげたこれからの時代ではなおさらである。

「人間」の技芸の最も大きな土台となっているのが「言葉」である。私は奄美の古い芸能の伝承に関わる中で、言葉や技芸がこの数十年という短い時間の中でも大きく変化していることに気づかされてきた。このまま進むだけでは「人間の技芸」はAIによって代替されていくだろう。(そのこと自体が単に悪いとは言えないが自覚的である必要はある)

もう一度「言葉」を知り、使いこなし、生きる技芸としていくためには、その起源から探し、学び、さらには言葉そのもの

のを進化させる必要があるだろう.これまでに ISLIS や SPC-F のイベントで何度か私がイメージする「言葉の起源から IT までの大きな流れ」をかいつまんでお話してきましたが,科学的な発表でもない内容を今までのテキストベースの講演で伝えるのに限界を感じてきた.

そこで,今回は新しい試みとして言葉だけでなく「映像表現」を取り入れた講演とし「言葉と技芸」についてのイメージを深めてみたい.(時間的に短いプロト版となる)

連絡先 : yoshifumi-furuhashi@iri-g.org

<ワークショップ> (仮 前回のまま)

シンギングボウルの共鳴現象：人と場のワンネスを考える

佐藤 克巳

佐藤整体院長 (日本, 千葉)



要旨：ワンネスとは, 全てが繋がり一つであるという概念である. これは単なる比喩ではなく, 現代物理学においても, あらゆる存在がミクロなレベルで相互に影響し合っていることが示唆されている. 本ワークショップで焦点を当てるシンギングボウルもまた, その振動を通して私たちを取り巻く「場」と共鳴し, 深い相互作用を生み出す.

全ての存在は, 分子, 原子といった微細な要素から構成されており, これらは絶えず振動している. 私たちの身体も例外ではなく, 内臓, 骨格, 筋肉, そして細胞の一つひとつに至るまで, 固有の振動パターンを持っている. これらの振動は, 私たちが意識せずとも, 周囲の環境や他の存在から発せられる振動と常に相互作用しているのだ.

特に興味深いのは, これらの関係性が単に個々の要素の足し算ではなく, **「場」**の影響を受けることでより複雑かつダイナミックなものになる点である. 例えば, 特定の空間にシンギングボウルを配置するだけで, その場のエネルギーが変化し, そこにいる人々の身体にも微細ながら明確な影響を与えることが観察される. これは, 物理的な距離や接触がなくとも, 振動が媒介となって情報が伝達され, 共鳴現象が起こっていると考えることができる.

私たちの身体は, この「場」と常に相互作用しており, その影響は, 経絡の状態, 関節の柔軟性, 内臓の緊張度, 筋肉のトーンといった多岐にわたる指標で確認できる. 例えば, シンギングボウルの音色や配置を変えることで, 肩の力が抜けやすくなったり, 呼吸が深まったりといった変化が起こることがある. これは, 目に見えない波動が, 私たちの身体の生理的な機能に直接的に作用している証拠と言えるだろう.

本ワークショップでは, この**「見えない波動と体の関係性」**を参加者自身が体験し, 深く探求することを目指す. 実際にシンギングボウルの音と振動を感じ, その配置を変えることで身体にどのような変化が起るのかを, ご自身の感覚を通して観察していただく. この実践的なアプローチにより, 私たちは日常的に意識することの少ない「ワンネス」の概念を, より具体的な身体感覚として捉え, 自己と世界の繋がりについて新たな洞察を得られることだろう.

キーワード：ワンネス, 共鳴現象, シンギングボウル, エネルギー, 波動

連絡先 : 佐藤 克巳 e7878n@gmail.com

<ワークショップ> (仮 前回のまま)

意識の比率と身体の使い方の関係性を知る

小原 大典

時間芸術学校クリカ 校長 (日本, 東京)



要旨：昭和 30 年代まで伊豆八幡野に隠棲していた哲人・肥田春充の「聖中心力」, バックミンスター・フラーの「Do more with less」, そしてチベットに伝わる「虹の身体」にインスピレーションを得て開発した心身共鳴統合システム「レインボー・i®」(Rainbow integrity) は, トレーニングを通じて筋肉を鍛えたり持久力をつけたりするのとは全く違ったアプローチで心身の統合度を高め, 生命力を活性化します.

具体的には, 身体を動かす時の意識の比率を, 習慣的な状態とは異なる比率に変えることで, 今ある体力のまま構造が強くなり, 筋力を無駄に使わなくなるのです. 結果として, 全ての動きが軽やかかつ楽になるということを, いくつかの遊びを通じて体感して頂こうと思っています. 年齢性別に関係なく, ご自身の身体に眠っている力の素晴らしさを知ることになるでしょう.

キーワード：比率、意識、心身、共鳴、統合

連絡先 : 241@kulika.com

<ワークショップ> (仮 前回のまま)

電磁波の話と測定

青木 威明

デンキノアオキ 代表 (日本, 千葉)

一級電気工事施工管理技士 第一種電気工事士 電磁波測定士



要旨：1964年の東京オリンピックの時から比べて、現在の電気使用量は10倍になり、又、ケーブルの使用量は一軒あたり、おおよそ150メートルだったのに対し、現在はおよそ1000メートル。コンセントや照明の数も、15か所程度が45か所程度に増えた。現代では切っても切り離せなくなった大変便利な電気について少し考えたい。

日本の電気設備の設置方法は、「内線規定」により規制されている。電気工作物の設計、施工、維持、管理等の技術的な事項が包括された民間自主規格。(2005年改訂→住宅のコンセントや照明の数を増やす様推奨され電化を後押し)

(更に2022年水廻りのアースが【勧告】→【義務】へ、全てのコンセントのアース接続が【推奨】→【勧告】へ)

日本では一般家庭用電源として、100Vの電圧が使われています。世界各国は200Vが主流。オームの法則により、電流が200Vの設備より二倍流れている。したがって磁界の発生も約二倍にもなっている。その様な状況なのに、一般家庭のリビングや寝室についているコンセントは、ほとんどアース端子が付いていないタイプです。そのため、家電にアース線が備わっていても、つなぐ場所がありません。つまり、家電製品側と建築側にコンセントギャップが生じているという現状です。パソコンやゲームの取扱説明書には必ずアース線を繋いでくださいと、書いてあります。これは、漏電火災や感電以外にも「電磁波」を逃がす通り道を作る意味があります。

日本の家は小さい割に電化製品が多い。電気配線で囲まれた鳥かごの様な状態。私達の様な都会生活者は【アーシング】が重要なのではないか? アースを接続している居住空間の利点を説明します。

また、アースが接続されていない住居のアーシング方法や、アース工事についても解説します。

国内外主要団体の電磁波に対するスタンスを確認しつつ、参加者がそれぞれに、電気との関わり方を見つけるきっかけになればと考えています。

キーワード：極低周波 電磁界 イオン 静電気 アーシング 25V/m 2.5μT

連絡先：青木 威明 denkinoaoki@gmail.com

<ワークショップ> (仮 前回のまま)

五感を高め第六感の覚醒

伊藤 二三男

パワーウェイク 代表 (日本, 静岡)



要旨：人間には本来自然治癒力があり、体を常に健康に保つようにできています。しかし、ストレスや心の問題、外的障害により、バランスを崩してしまいかがちです。

「POWER WAKE(パワーウェイク)」は、 α (アルファ)波を向上させ、集中力・記憶力・創造力を潜在脳より引き出し、身体のバランスを最適な状態に整えます。従来のヒーリングとは一線を画し、電磁波対策に特化したパワーウェイクを使用し、施術場所、施術者、被験者の脳波をベーター波領域からアルファー波領域に整え 短時間、高機能のヒーリングを確立しました。

キーワード：六感の覚醒と自己治癒力の向上

連絡先：伊藤 二三男 fumio101773@gmail.com

<講演/ミニワークショップ> (仮 前回のまま)

太陽のたねを蒔く～たねの気づき

— Seed Consciousness がひらく農・文化・平和の未来

浜口 真理子

ピースシード代表 (日本, 東京)

シードセイバー/コンセプト・エンジニア

要旨：たねの気づき (Seed Consciousness) が芽生えた時、世界の見え方は変容する。たねは比喩であり深淵なる実存である。ヴェーダンタやヨガ哲学では、すべての現象の始まりとなる根源的な振動を”ビージャ・マントラ (種子のマントラ)”と呼び、宇宙の創生と結びついている。たねは生命、根源、可能性を象徴し、かつ植物の種子という生物学的な、地球上の生命に必要不可欠な存在である。特に作物のたねは、人とともに共進化し文化の多様性を育んできた。連綿と続く時間の中で磨かれたたねは、まさに人類共通の財産なのである。

だが,そのたねをめぐる世界には,今,何が起きているのだろうか? 国連食糧農業機関(FAO)によると,20世紀中に農作物の遺伝的多様性の75%が喪失したと報告されている。特に1960年代以降,工業的農業の進展と共に,収量や流通適性を優先した近代種子に切り替わり,在来種が世界各地で消滅していった。また,紛争,自然災害,気候変動などもその減少に拍車をかけている。日本や世界の公的機関では20世紀初頭から遺伝資源の探索と収集が始まった。1970年代頃には,たねの大切さに気づいた市民によって,家宝種一先祖代々受けつがれてきたたねを受け継ぎ守る活動が広がり,世界中の人々が魅力あふれる文化遺産として,たねを分かち合うネットワークやシードバンクを作り,たねを受け継ぎ保全してきた。

2000年,千葉県香取市にピースシードを共同創設した。以来,国内外のたねの守り手たちと交流してきた。活動を通じて,日本人の自然観や精神文化がたねとの関係においてもきわめてユニークであることに気がついた。ところが,こうした価値観は国際会議の場ではしばしば見過ごされる。英語を中心とした西洋的価値観に裏打ちされた議論では,たねと人間の関係性に含まれる精神性や情緒が翻訳されにくく,表層的な「伝統文化」としてしか扱われない。私はそのような傾向に対し違和感を覚えるようになり,精神性が「たね」をはじめとする自然資源の扱い方にどのような影響を与えるかを,科学的かつ多分野融合的に検証する必要性を痛感してきた。こうした研究や実践を,日本から国際的に発信できるならば,それは世界中の農民や地域コミュニティにとって,新たな倫理的指針となる可能性を秘めている。

将来的には,千葉県北総エリアに,日本の情緒を活かしたフォーマルとインフォーマルをつなぐ農業生物文化多様性センター(仮称)の設立を構想している。これは,シードアーカイブ,学校,農の実践場を一体化した拠点であり,世界的にも先進的なモデルになるだろう。ここは食糧主権・種子主権といった社会的課題に内発的に取り組むと同時に,たねを通して人類共通の財産について深く哲学し,平和を学ぶ場なのである。

今回の講演では,世界各地のたねをめぐる事例や,私自身のプロジェクトの歩みを通じて,たねが持つホリスティックな意義を再考し,多様な立場の人々がどのように対等な立場で共創できるのか,その可能性を参加者の皆さんと共に思索したい。そして,個人の中に芽生える「たねの気づき」が,これからどのように育っていくのか,共に楽しみたいと願っている。また,“たねの気づき”を,体験を通じて実感できるミニ・ワークショップも用意しています。

キーワード: たね,シードセイバー,自家採取,シードバンク,シードアーカイブ,シードライブラリー,種子保全システム,たねへの気づき,シードコンシャスネス,生物多様性,生物文化多様性

<体験報告> (仮 前回のまま)

農と食の imagination

伊藤 照夫

株式会社 アイ・ティー・オー 代表取締役 (日本,千葉)

要旨: 農と食をめぐる悪化の状況は,変わらない。有機農業と慣行農業の農業栽培2形態のことについて語られて久しいが,有機農業は我が国でそして世界で長い歴史を有して行われてきた潜在的な農業形態であるものの,慣行農業に主体を奪われてしまい,遅々として進化しない。かつての日本は,美しい農村風景が全国に広がり,地方の活力が感じ取れ,文化も培ってきた。その光景は今や見られない。それは,どこに行ってしまったのか? その原因を想像(imagination)してみる。主なコンテンツは,以下の通り。

1. 自然栽培から慣行栽培へ

- ① 農薬と化学肥料は,戦争から -戦後の食料増産の担い手-
- ② 食糧増産は国土を変えた -湖沼の干拓,森林の開墾-
- ③ 進む環境汚染・破壊 -地圏・水圏の汚染の蔓延-

2. 自然栽培と慣行栽培の違い

- ① 作物への農薬・化学肥料の影響 -作物の生物的特性を変える-
- ② 食べ物としての機能の違い -外的圧力への抵抗力の違い-
- ③ 食品の安全性の懸念 -免疫力の問題-

3. 農業生産力の推移

- ① 農地面積の減少 -国土の荒廃,防災力の低下-
- ② 農業従事者の減少 -地方の活力・文化の喪失-
- ③ 自給率の減少 -食の安全保障の脆弱化-

キーワード: 慣行栽培, 自然栽培, 農地面積, 農業従事者, 自給率

連絡先 047-389-9367 E-mail ito-90@mrh.biglobe.ne.jp



<学会 FES Vol.1 「癒しの響き 至福の時」> (仮 前回のまま)

「ペヨーテソング～ネイティブ・アメリカン・チャーチの祈りの唄」 唄と演奏・ライブ・トーク

荒井 紀人, 伊藤 淳

科学平和文化財団 (SPC-F) (日本, 千葉)

要旨: ペヨーテ (*Lophophora williamsii*) は、アメリカ南西部とメキシコ北部の乾燥地帯が原産の、小さく成長が遅いサボテンです。その向精神作用は、主にメスカリンという天然の幻覚性アルカロイドを高濃度で含有していることによります。ペヨーテは主に先住民コミュニティにおいて、何千もの間、神聖な薬として使用されており、19世紀後半からは特にネイティブ・アメリカン・チャーチ (NAC) によって、靈的、精神的、感情的、肉体的な癒しのための神聖な秘蹟であり、強力なメディシンと見なされています。

NAC のペヨーテ・セレモニーの主な目的は、精神的なつながり、深い洞察と内省、多元的な癒し、共同体の結束、伝統と文化の継承等です。

ペヨーテ音楽の特徴は、まず、極めて高い各パート（唄とラトルとウォーター・ドラム）の律動の高度なシンクロにあります。その共振する響きは、独特の時間を生み出し、聴く人を日常の時間とは違う変性意識状態に誘います。マントラ的なペヨーテソングのリフレイン、ひょうたんラトルの複雑で豊かな倍音、さらに、ドラムの中に水を入れて、水を振動させて音を出力するウォーター・ドラムの倍音の響きには、多元的な癒しをもたらす効果があります。特に、ペヨーテ・セレモニーにおいては、共に唄い、音を奏でることによって、即興的なユニゾンを生み出し、全体の一体感と調和感が高まります。

全米で推定 35 万人いると言わわれている NAC の存在も、そのセレモニーで用いられるペヨーテ音楽も、今まで、日本で紹介されたことはほとんどありませんでした。1987 年に NAC (サウスダコタ) のメンバーになった荒井紀人は、以来、ペヨーテソングを唄って祈り続けており、今回は、荒井紀人（ペヨーテ・ソング & 飄簫ラトル）と伊藤淳（ウォーター・ドラム）の二人でペヨーテ音楽の紹介と演奏を行います。

キーワード: ネイティブ・アメリカン・チャーチ/ペヨーテ・ソング/ウォーター・ドラム/ひょうたんラトル



(仮 前回のまま)

アルケミー・クリスタルボウルによる倍音浴

牧野 持侑

マスター・サウンドアルケミスト

株式会社 くりすたり庵代表 (日本, 静岡)

要旨: アメリカ在住時の 1985 年、初めてクリスタルボウルに出会い、その響きに魅せられ、数個のクリスタルボウルの購入をきっかけに、「音による癒し」の道を歩み始めました。

1996 年に帰国以来、伊豆に拠点を構え、クリスタルボウルをメインとしたサウンド・ヒーリングコンサート、ワークショップをはじめ、講師としてクリスタルボウルの講座、奏者の育成を長年行っています。

今年はちょうど出会ってから 40 年の節目ですが、現在では日本はもとより、世界的にクリスタルボウルの認知度が高まり、クリスタルボウル奏者やヒーラーが国籍や性別、年齢に関わらず多数活動されるようになっています。

2002 年に、従来の白色の「フロスティッド・クリスタルボウル」とは製法、音色・響きの異なる「アルケミー・クリスタルボウル」という新種の製品が初めて紹介され、以来 23 年、このアルケミー・クリスタルボウルを数十個を使用したコンサートやサウンドヒーリング活動を行っています。その特徴は、従来のフロスティッドボウルでは不可能であった「倍音」が豊かであることです。この倍音が音の癒しにおいては不可欠の重要な響き、要素であり、今回のライブにおいて、その倍音豊かな響きを皆さんに体験していただきたいと思います。

*「倍音浴」は造語であり、くりすたり庵で商標登録されています。



(仮 前回のまま)

奄美に残っていた古層の芸能「八月踊り」ワークショップと実演 結

楽器編成等 (基本的にPAなし。アコースティックです)
手持ち太鼓 奄美三味線 ギター の中から適宜選択



要旨: 奄美の八月踊りは 奄美大島や加計呂麻島を中心とした奄美群島の中のいくつ
かの島の各集落で伝承されてきた民俗芸能です。旧暦の八月十五日の満月の月明かり
の下で夜を徹して,もしかしたらもっと昔は何日にも渡って踊られました。男女が輪に
なって会話のように唄をかけながら,手持ちの太鼓の他は,はやし声かけ声や,指笛などの身体を使った楽器だけで
踊られます。今回のフェスでは実際の唄掛けはできませんが,かけ声等で声も出していただきながら皆さんと一緒に輪
になりたいと思っています。 私が受け継いでいる八月踊りやシマ唄は,奄美群島の中の「加計呂麻」島の「花富」集落
のものです。 60年以上前に島を出て多くは関東で暮らしてきた師匠から受け継いだそれは ちょうど「タイムマシン」
のように,現代的になる前の「花富」の踊りが残されたものです。日本でも辺境中の辺境とも言えたその頃の集落には,は
るか昔の生活の残照がまだ残ありました。もちろん完全にではなく琉球王朝や薩摩を経由して西側発祥の現代的な文
化は入ってはいましたが 他の多くの地域のようにそれに塗りつぶされることなく古い「唄」や「身体」が残されてい
たことが,師匠の唄や踊りからはうかがえるのです。

その師匠から伝えられた古い花富集落の八月踊りが,今の世界を読み解き,次世代を作っていくうえでとても重要なこ
とであるという考えに至るまでは長い年月が必要でした.何の説明もなければそれは,現代も各地で行われている盆
踊りや,今の八月踊りのちょっと原始的なバージョンでしかないと感じられます. そうした話は今回のシンポジウムの
中の別の時間に少しお話ししますが,このフェスの時間枠では,皆さんにその片鱗を体験していただけたらと思います.

キーワード:奄美, 八月踊り, シマ唄, 加計呂麻, 花富, 朝崎郁恵, 旧暦, 満月, 民俗芸能, 始原的, エートス, 反復 祭,
あそび, 風土臨床, 神ごと, 輪踊り, 唄かけ, 歌垣, 古層の芸能

連絡先 : yoshifumi-furuhashi@iri-g.org